

フィールドワーク便り

タンザニアの「ブッダ」あるいは「日本の神様」

川 西 陽 一*

東アフリカのお土産品の1つに、木彫がある。その多くは黒色で、なかにはマホガニーに黒色塗料を塗ってそれらしくみせているものもあるが、本来は、スワヒリ語で *mpingo*（通称；African blackwood, African ebony, Black ebony, 学名：*Dalbergia melanoxylon*）とよばれるアフリカ黒檀が使われている（写真1）。この木は、『アフリカの広い地域に分布しているが、多くみられるのはタンザニアとモザンビークに限られる』という。¹⁾ そし

て、実際に流通しているアフリカ黒檀製の彫刻は、ほとんどすべてがタンザニア産のものである。この木はまた、床や楽器の材としても使用され、大変硬くてその商品価値は非常に高い。

タンザニア、ダルエスサラーム市内のムウェンゲ地区には、東アフリカにおけるアフリカ黒檀製彫刻の一大集積地である「Makonde Handcraft Village（以下、マコンデ村）」がある（写真2）。当地には100軒近くのお土産品店があり、約400人もの人々が店の軒先で実際の手作業に従事している光景を見ることができる。また、陳列商品のなか



写真1 プワニ州ニヤマト村近くにて、アフリカ黒檀の幼木。高さは3~4mほど。



写真2 マコンデ村の昼下がり。店の並びの様子、曇天。

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

1) The Mpingo Conservation Project. <http://www.sbcamp.demon.co.uk/> (2004年8月8日)

には、ケニアやマラウイ、ジンバブエなどで作られた非アフリカ黒檀製の木彫や、石彫刻、布類なども少なくない。

この区画の名称に冠された「Makonde(以下、マコンデ)」とは一民族集団の名前であり、観光客にはアフリカ黒檀製の木彫の彫り手として知られている。彼らは、遅くとも1800年代後半にはモザンビーク北部からタンザニア南部にかけて、国境のルヴマ川をはさんだ丘陵地域に居住していた。その多くはモザンビーク側にいたが、度重なる飢饉や隣接する民族集団との衝突が契機となり、また、後にはモザンビーク内戦の難を逃るために、あるいは職を求めてタンザニア側へ移住する者が増えていった。

マコンデ村で手作業に従事している者たち、マコンデの人々は半数以上を占める。彼らは「自分がマコンデであり、たとえタンザニアで生まれていても、何らかの形でモザンビークに縁故がある」ことを強調するとともに、「タンザニア出身のマコンデは彫刻を行わない」と、自らの出自をほのめかす。とはいえ、タンザニアには、120～130もの民族集団が存在し、特に都市部では彼らをふくめ多くの民族集団の人々が、幾分の偏りはあるにせよ、混在した状況のなかで平穏に暮らしている。そのような現状から、少なくとも現在、その民族集団を理由として多大な不利益を被ることはないと考えられる。こうしたなかで、一民族集団への帰属を強固に表明するにとどまらず、他国にゆかりを求める彼らの態度には一種独特な印象を受ける。

また、作業従事者約400人のうち、約50人

は装飾家具などを製作する職人で、いわゆるアフリカ黒檀製の彫刻を扱う職人は350人ほどである。しかしこれらの人々は、逐一、原木から彫っているわけではない。ここには、ダルエスサラーム近郊の農村部や、タンザニア南部のムトゥワラ州から概形を彫っただけの木彫が運び込まれており、職人たちはやすりがけや破損箇所の補修といった仕上げ作業を行う。彫刻の全工程を1人でこなす人はほとんどおらず、さらに作業の大半は請負である(写真3)。概形を彫られただけの彫刻を購入した店の経営者などが、その仕上げ作業を職人たちに依頼するというわけだ。職人のなかでも、多少なりとも金銭的余裕のある者は、請負作業の合間に自ら購入した彫刻に仕上げを施し、懇意にしている店舗で陳列させてもらうこともある。

農村部と都市部との間でこのような分業体制が成立した理由はいくつかある。第1に、アフリカ黒檀は 1cm^3 あたり1g以上の比重をもつため、ダルエスサラーム市内まで丸太のまま運ぶよりは、むしろ材の伐採地(写



写真3 マコンデ村の夕暮れ。仕上げ作業にいそしむ職人たち。



写真4 プワニ州キサラーウェ郡、アフリカ黒檀伐採拠点。彼らは右奥の三角の小屋で寝泊りしている。



写真5 「キリン」、約40 cm.

真4) や、その近辺の農村で加工したほうがよい。第2に、農村部では布（紙）やすりや接着剤といった仕上げ作業に必要なものが手に入りにくい。第3には「やすりを買って来て（時間のかかる）仕上げをして売っても、たいして高く売れるわけでもない。概形を彫ってそのまま売った方が金になる」という。

ところで木彫の名称は2つの系統に分類することが可能である。まず1つ、キリンやマサイといった彫刻の対象となる主題そのものの名称がある。次に、彫刻の形態や様相そのものが彫刻の1つの種類として認知されている場合には、その様式（形式）に付与された名称がある。これらの例として以下のようないふてが挙げられる。まず、主題に関する名称としては、

- ・キリン（写真5）
- ・ゾウ（写真6）
- ・マサイ（写真7）
- ・タンザニア女性（写真8）
- ・老人（写真9）

などがある。また、様式に関する名称として



写真6 「ゾウ」、中央のもので約20 cm.



写真7 「マサイ」は東アフリカの一遊牧民の民族集団名。約40 cm.



写真8 「タンザニア女性」は若い女性が魅力的に彫られたものについていう。約15 cm.



写真10 「ウジャマー」はスワヒリ語で「親戚関係」「兄弟関係」の意。人々が重なり合って支え合い、柱状になっている。写真のものは「ウジャマー」の大きさとしては、最も小さい部類に入る。約30 cm.



写真9 「老人」、約50 cm.



写真11 「シェタニ」はスワヒリ語で「悪霊」の意。悪霊そのものを彫るため、形態的自由度が高い。中央のもので約50 cm.

は、

- ・ウジャマー（写真10）
- ・シェタニ（写真11、12）
- ・スケルトン（写真13）
- ・マウイング（写真14、15）
- ・マドンナ（写真16）

などが挙げられる。たとえば、写真16のようなものを注文する際には、作り手に「マサ

イのマドンナが欲しい」と伝えればよい。ただ、キリンを彫るのに長じていると認識されている彫刻家が受ける注文はキリンの注文ばかりであり、その結果として彫刻家は始終キリンを彫ることになる。普段はそのようなキ



写真 12 「シェタニ」高さ 40~50 cm, 幅 50~60 cm.



写真 14 「マウイング」スワヒリ語で「雲」の意。人を主題とし、丸みを帯びた形態を特徴とするもの。約 30 cm.



写真 13 「スケルトン」は英語の「skeleton」に由来。四肢が極端に細く加工された人物像。約 20 cm.



写真 15 「マウイング」約 20 cm.

リンばかりを彫っている彫刻家には、ウジャマーを作つてほしいという注文は来ないし、逆もまたしかりである。

彫刻がマコンデ村に運び込まれるのには、普段マコンデ村で彫刻を扱う人々が農村部にいる彫刻家のものとへ直接出かける場合と、農村部の彫刻家自身や、農村部とマコンデ村を結ぶ仲買人によって木彫が持ち込まれる場合

との2通りがある。十把一絡げに木彫を買い上げて薄利多売で商売を行うのであれば、どのような彫刻を仕入れるかにさしたる配慮は必要ない。しかし、一方で高く売れるであろうそれなりの質のものを揃えたいと考えている者もいる。これらの方針選択に資本金の有無は無関係ではない。自ら彫り手のもとに赴かなければ、良質のものを手に入れることは



写真16 マサイのマドンナ。「マドンナ」は平板を彫刻したもので、基本的に1対1組になっている。2対のマドンナから片方ずつ並べた。大きいものは約60cm、小さいものは約43cm。アフリカ黒檀製。

難しく、さらに良質なら値段も張るわけで、その値段を抑えるためにも農村部へ行かなければなければならない。

仕入れ手から彫刻者へ「このようなものを彫って欲しい」という意思伝達が行われるとすれば、農村部への買付け時ということになる。とはいえる、多くの場合、先に述べたように仕入れ手はその彫刻家がすでに彫っている特定の作品を目当てに出かけていくのである。すなわち、彫刻そのものの微妙なニュアンスについて討議されることがあっても、「見たこともない彫刻を彫ってくれ」という試みが画策されるとは考えにくい。とすればこのような現状で新たな彫刻が生まれることはないのか。アフリカ黒檀の彫刻作家として

世界的に有名になった、経済的余裕のある一握りの彫刻家たちが彫ったものが模倣され、そして市場に出回るのであろうか。

分業体制が成立したことによって、仕入れ手と農村部の彫刻家との間には「何を彫る（彫ってほしい）か」という展望や判断に関する齟齬が生まれると思われる。お土産彫刻は、俗に「airport art」とか、「souvenir art」とかよばれており、独創性のない大量生産品であるというように、往々にして手厳しい評価を下される。もちろん、そのような側面があることは否定できない。前述の「シェタニ」は「1960年代にインド人商人の経済的支援のもとに生み出された新たな形式²⁾」である。つまりいわゆる商業主義によってアフリカ黒檀製の木彫が刷新されたわけである。彼は彫刻家に丸太を与えたが「どのように彫って欲しいか」を具体的に提示することではなく、できあがった作品が気に入ればそれを買い上げていただけだった。これをふまえれば、仕入れ手と彫り手の間の「何を彫る（彫ってほしい）か」に関する企図が食い違いうる状況においても、それまでにみたこともない独創的作品が生まれ、それを商人が市場に出す可能性は十分にあると考えられるが、実際はどうなのだろうか。逆に商人が彫り手に注文を出すという現在の状況は、大量生産品の製作に拍車をかけるとも考えられる。この答えを出すまえに私が見聞きしたことを紹介したい。

あるとき、「お前は日本人だろう。ブッダ

2) 「Samaki がシェタニを初めて作ったのは 1959 年」とあるが、当時まだ「（シェタニとして）模倣する原型がまだなく」、その洗練されていくまでの暗中模索の時期を考慮し、ここでは「1960 年代」と記した [Kasfir 1980]。

の彫刻があるんだが買わないか。まあ、とりあえずは見に来い」といわれて、陳列棚で対面したのが写真17の彫刻だった。仏教の話題はよくわからないのだが、それにしてもこれが少なくとも日本でブッダとよばれるものではないことはわかる。その体格から七福神の1人ではないかとあたりはつくが、それ以上のことは見当もつかない。彼は落胆気味に「これはブッダではないのか」と聞いてきたが、「おそらく中国からの観光客が注文して作ったものではないか。日本ではみたことがない」としかいいようがない。「これは誰が彫ったのか」と尋ねれば、「わからない。村から持ち込まれたので買った」との答え。

それから約1年経っても、この彫刻には買い手がつかず放置されており、彫刻の持ち主に哀願されて結局私はこれを購入することとなった。日本に着いてから、知人をつかまえてはこれがいかなるものかを聞いて回ったところ、多くの人から「(袋を持っていないが)おそらく七福神の布袋和尚ではないか」とい

う回答を得たが、布袋和尚がどこをどう巡ればブッダとつながるのか、いまいち腑に落ちなかつた。

そんなとき、ちょうど中国からの留学生や仏教愛好家と相席する機会があったので、この疑問をもち出してみた。聞けば、どうやら「中国では布袋と弥勒菩薩は同一物である」ということらしい。そうなると、おそらくタンザニア人に「これは何か」と聞かれた中国人が「ブッダ（という仏教の神様のようなもの）である」という相手にわかりやすい答えをしたのだろうという推測がたち、一同「なるほどそんなところだろう」と合点がいったのであった。

ところが、もう1つ、「日本の神様だ」と紹介されたものがある（写真18）。運良くこの彫刻を注文した人とも話すことができたが、「美術写真集でこの日本の神様をみつけた。ヨーロッパあたりに売るつもりだ」と意気揚揚と私に語ってくれた。私にはこれが何であるかまったく思い当たらなかつたが、こ



写真17 「ブッダ」アフリカ黒檀製。約30 cm.



写真18 「日本の神様」約1.5 m.

れはマコンデ村で彫られていたため、多くの人が私に「日本の神様をみたか?」といつては、それに対する説明を求めてくるのにはいささか閉口した。

先ほどの作品と同様に、日本で知人たちにその写真をみせて「タンザニアで日本の神様に出会った。しかし一体これはどういうことだ」と問いかけてみた。私自身は悩んだあげく「ポリネシアあたりの神様だろう」という憶測に落ち着いたのだが、意外なことに知人たちはその彫刻に「日本」を見出していた。「腰のあたりの衣服から、ヤマトタケルノミコトの時代の人では」とか、「掌を見せてるのは、仁王像をアフリカ風にデフォルメしたものなのでは」という人もいたし、はたまた「顔がのっぺりしているところをみれば、いかにも仏像ではないか。(仏像の)寂靜とした雰囲気が醸し出されているといえないこともない」などという想像逞しい意見が聞かれた。しかしどの意見も、今ひとつ「日本の神様」の来歴をうまく説明するには至らなかつた(識者の方々のご判断をお聞かせ願いたい)。

その邂逅から約1ヵ月がたち、「日本の神様」はすでに完成して運び出されていた。ある日、私はまた別の彫刻家に呼び止められた。「おい、お前これを知っているか」そう言って見せてくれたものは、高さ1mほどで、材にはアフリカ黒檀が使われていたが、先目にした「それ」を主題としたものであることは一目瞭然であった。そして彼は誇らしげに「日本の神様だ」と付け加えた。

大いなる誤解、まさにここにきわまれり

といった感があるが、むしろこののようなできごとが彼らの彫刻を刷新していく契機となることもあるのではないだろうかと思う。この「日本の神様」は写真を模倣して作られたものだが、その製作には比較的独創性を必要とすると考えられる「シェタニ」「ウジャマー」「マウイング」といった彫刻が広く作られ、新しい形式として受け入れられていった過程もまた、模倣の繰り返しであったに違いない。模倣は新たな創作の試みに追随する洗練の試みであるともいえる。

「シェタニ」の様式の創生に寄与した「インド人商人の経済的支援は、形式の変化を生み出すには十分でなかったが必要であった(注2)参照」という。他方「ウジャマー」は、ダルエスサラーム北部にあるボコ村で1人の彫刻家が彫りだしたが、「シェタニ」の場合とは異なり、購入行為以上の商人からの庇護はなかった。一作品が形式として継承されていくためには、彫刻を店頭に並べる商人、ひいては観光客が食指を動かすことが必要であろうが、その端緒としての創造行為は商業主義とは無関係に、常に行われているのではないかと思う。もしもこの「日本の神様」が作られ続けるのならば、よりいっそ洗練されていき、そして観光地のお土産品店で「新しいアフリカ黒檀彫刻」と銘打たれた「日本の神様」に、出会える日が来るかもしれない。

引 用 文 献

- Kasfir, S. L. 1980. Patronage and Maconde Carvers, *African Arts* 13(3): 67-70.

「おかげはな～に？」

— フィリピン・サマール島の海辺から —

細 田 尚 美*

バト村の早朝は賑やかだ。

2月初旬のある朝、この日もアロ（aro、請願、おねだり）すると言っていたティミーら村の若者たちと一緒に、私はまだ薄暗い午前6時前から、村の波止場で海から戻る漁師たちを待っていた。6時を回ったころから、靄につつまれ鏡のように静かなサマール海に小舟の姿が見えはじめた。いつのまにか、波止場や海辺には老若男女が集まり、世間話をしながらも、戻ってくる漁師たちを注意深く観察している。豊漁だったとおぼしき舟を見定めては駆け寄り、おこぼれにあづかろうとうのだ。

この朝一番の大漁だったのは、村で最大の舟をもつタソイだった。舟から降りてくる5人の男たちがそれぞれ1メートルはゆうに超えるサワラを抱え、波止場に集まった村の人間をくぐり抜けていくさまは、まさに凱旋といえる（写真1, 2）。慣れている様子のティミーは、タソイの舟が波止場につけられるやいなや、ほかの青年たちとともに舟に乗り込み、サワラ以外の「小物」の入ったバケツを運び出すのを手伝いはじめた。作業が一段落したところで、ティミーはタソイがバケツの中から取り出した3匹の魚を黙って受け取った。その約30分後、魚の仲買人が村に立ち



写真1 タソイらがつかまえたサワラ



写真2 早朝、波止場に老若男女が集まる

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

寄り、タソイはサワラ5匹を1キロ80ペソ(1ペソは0.5円)で売り、仲買人は近くの町の魚市場へと向かった。

一方、村ではスラ(*sura*)、おかげが手に入ったと喜んで家に帰る人たちを尻目に、ローデスは渋い顔だった。彼女は村の若い男たちを使って材木業を営んでいる。ティミーのようにスラを手に入れてしまった人は、その日の人足集めに応じないことが多く、ココヤシ材の切出し作業が進まないからだ。

「スラ」との出会い

スラという言葉に興味を引かれたのは、フィリピン中部にあるサマール島西岸のバト村で調査を始めて2日目だった。案内役を買って出てくれた女の子と一緒に、村内を歩いていた時のこと、道端で出会った人たちから、自己紹介もすまないうちに「あそこんち(ホームステイ先の村長宅)のスラはな～に?」と口々に聞かれ、面食らった。それから数日経って、村長の長男が「何を書いているのか」とフィールドノートを書いている私に尋ねた。「その日何をしたのかとか、何を食べたのか…」と答えると、「食べた物を書いているのか」と一瞬、怪訝な顔つきになった。しばらく経って、地元のワライ語を少し使いはじめると、ある村の人が私のワライ語を愛想良くほめたあとに続けた。「日本に帰ったら言ってやりな、ナノ・アン・スラ?、おかげはな～に?って。(知らない言葉を聞いて)みんな驚くよ」いきなり出てきたワライ語の典型的基本文が、この村では「こんにちは」などの挨拶文でも、「これはペンで

す」のような教科書的な文でもなく、「おかげは何?」だった。おかげを聞くここでは挨拶みたいなものかもしれない、という考えが頭をよぎった。

食が人々の关心事の中で非常に重要な地位を占めることは、バト村にかぎらず、世界各地で認められる。フィリピン国内の他の地域でも、食に関するフレーズが挨拶代わりのように使われている。初対面の人からの第一声が「食べましたか?」という場面に出くわし、とまどった経験は、たとえば、マニラの超高層ビルの中でもあった。しかし、マニラでもサマール島の都市部でも、スラあるいはそれに相当する地域語が日常会話のキーワードの1つだとは感じなかった。バト村に来て初めて、スラという言葉を耳にしたときに敏感になった。

私の研究テーマはサマール島民のマニラ移住過程であり、食べ物に特別な注意を払っていたわけではない。だが、「スラ」にはなにかひっかかるものを感じ、とりあえずその言葉に関係した状況をノートにメモはじめた。のべ1年以上滞在することになったバト村で、スラは家の軒先やサリサリストア(小規模雑貨店)の前に置かれた縁台で交わされるおしゃべりで頻繁に登場した(写真3)。また、特に夕刻ごろになるとスラを探して村内を動き回る人たちと出くわした。そうしたスラが登場する場面を記した雑多なメモをもとに、このフィールド便りでは、スラの順位づけやスラをめぐるやりとりの様子を紹介することで、断片的かつ暫定的ながらも、村の人間関係を中心とした日常的一面を描いてみ



写真3 サリサリストアの前は日々の社交の場

たい。

経済状況の「速報板」

スラは主食の米と一緒に食べる副食を指すが、実際の会話では、おそらく広義として、米以外の食べ物も含まれる（写真4）。

スラが話題になるとき、もっとも同情を引くのは粥とバナナだ。食べ物がこの2種しかないとなると、債務不履行と宣言するようなものである。ある日、「うちも大変なんだから、今日こそはコラから借金を返してもらう」と意気込んでコラの家に向かったルスは、じきに手ぶらで帰ってきた。彼女曰く、「家の前にジュリエット（コラの4歳になる娘）がいてね、何を食べたんだって聞いたら、お粥だって。腹がすいているって庭先をうろついているんだもの」。バナナにはいろいろな種類があるが、ここで話題にしているのはアルダバとよばれる料理用バナナである。これをゆでたものは、朝食やおやつ、あるいは副食として食べるが、主食となったら貧しさの代名詞だ。

写真4 スラの例：(前列左から) 焼ナス, トゥリガン (*tulingan*, サバの一種) の炭火焼, 鶏肉のスープ, (後列左から) ご飯, 鶏肉のスープ, サツマイモとサトイモ, 塩を加えた酢 (つけソース)

スラ番付の下から2番目の分類に入るのは、ブドなどと称される塩魚である。1匹2ペソで3人分ぐらいのおかずとなるほど塩辛い。塩魚とほぼ同列に扱われる食べ物がトウモロコシ米だ。白色トウモロコシをひき割りにして米と同じようにたく。村人の中にはトウモロコシ米は腹持ちがよいので好きだという人もいる。とはいえ、トウモロコシ米が白米よりずっと低い地位におとしめられているのは、その値段のためだろう。村のサリサリストアでは、白米の半分以下の値段で売られている。

根菜類（サツマイモ、キャッサバ、サトイモなど）、野菜（十六ササゲ、隼人ウリ、ナスなど）、野菜のように煮炊きする果物（パパイヤ、ジャックフルーツなど）も位置づけが低い。これらの作物は村内での売買や自家消費用に畑や庭先で栽培されている。前述のコラは、マニラ在住の夫からの送金が遅れて頭を悩ませていた時期に、家の前を通り

かかったルス（ルスはコラがしばしば金や米を借りる友人）に聞いた。「さっき食べたスラはな～に？」ルスは「野菜だけ」と困った表情をみせた。もっとも、本当に野菜だけだったのかどうかは不明で、ブタ肉入りスープだったといううわさがあとで流れている。

塩魚や野菜よりも少しまじで、いわゆる「ふつう」とみなされている部類のスラは、魚介類、インスタントラーメン、缶詰類などである。冒頭に書いたように、釣れた魚のうち大きなものは「マニラ」（都会の意）や「アブロード」（外国）行きとして村外へ運ばれ、村自体ではカタクチイワシやイトヨリといった小ぶりの魚を酢、ニンニク、生姜をベースとしたスープにしたり、炭火で焼いたりして食べる。

魚介類は、村人の間ではおそらくタダでもらうことも、近くの漁村から自転車にバケツを下げてやって来る行商人から「買う」こともある。ただし、買うといっても1軒分で10~15ペソ程度と村の物価からしてそんなに高くはなく、なにがしかの現金収入のある家庭では買って済ますことも珍しくない。また、バト村では6~8月あたりを中心季節風のために漁に出られない時期があり、そんなときにはサリサリストアでインスタントラーメン（汁物として飯の上にかける）、イワシなどの缶詰、あるいは卵を買っておかずにする。これらも1軒分でだいたい10~15ペソである。

最後に、上等のスラとみなされているものとしては、肉類（村内で飼われているブタやトリを絞めたもののほか、町で買ったポーク

バーベキュー や フライドチキンも）、大ぶりの魚、スパゲティ、パンシット（中華風の麺類）などがある。肉類や麺類は、フィエスタやクリスマスなどの特別の日の定番メニューである。ただし、特別の日に出されるときにはハンド（*handa*、ご馳走）とよばれ、スラとはよばれない。ハンドは交友関係のある人たちと会食するが、スラの場合は家族だけで食べる。これらのスラがたびたび出ているとの評判がある家は「金持ち」だとして羨望の目でみられる。また、「金持ち」でない家でこれらのスラが出たとなると、「何があったんだ？」「どこから金が入った？」と格好のうわさ話の種となる。

以上の分類や順位づけは、各スラが話題になったときの村の人たちの反応に基づいて私が行ったものである。借金を取り立てに行つたはずのルスが、粥を食べているという家からは取り上げられないと帰ってきたように、取立てのような相手の経済状況を見きわめる必要があるとき、スラが客観的な判断基準の1つとして用いられている。住居や服装といった別の尺度もあるが、スラほどそのときどきの経済状況を敏感には反映しない。さらに、頼みごとが成立するか不確かなときなど、まともに断られて関係が悪くならないように、あらかじめ互いの状況——経済的な現実だけでなく、相手に対する気分的なものも含めて——を探る社交術の小道具になっているとも思える。

親疎さを映し出す鏡

バト村の中には月給取りや、冒頭に書いた

ローデスのように商人となり、少なくとも当座はスラの心配がないようにみえる家が若干ある。しかし、大多数は小規模な農業か漁業あるいは村内外での日雇い労働で生計を立てており、そうした家々では、スラがあるかないとは日々の切実な関心事となっている。では、天候が悪かったり、仕事がなかつたりしてスラが手に入らない日にはどうするか。

1つは、雇用や取引関係のある人からスラをつけて買うという方法である。現在のバト村で主な雇用先は材木業であるが、ローデスなどの雇用主はサリサリストアも経営しており、従業員はその店でスラをつけて買う。同様のことは、コプラの仲買人と生産者の間でも行われている。コプラというのは、ココナツの胚乳を乾燥させたものでマーガリンや石鹼の材料になり、サマール島の主要産品である。

雇用や取引関係がなくとも村内のほとんどのサリサリストアではつけがきく。この場合は、労働やコプラといった担保がない分、取立ての問題が深刻だ。余裕のない人たちから厳しく取り立てれば悪い評判が立ち、ほかの顧客どころか日常生活の仲間さえ失いかねない。よって、相手の経済状況を時おり見計らって取立てのチャンスをうかがったり、相手の面子を傷つけないようにと、取立てには大人ではなく子供を使いにやったりなどの工夫をしている。加えて、本当に窮乏している人に対してはつけではなく無償で恵んだりすることもある。

つけ買いと同じくらい頻繁にみられるのが、非常に親しい間柄の人たちの間でスラ

を融通し合うことだ。ある日の夕暮れ時、2人の子供の手をひいたニニと道端で出会った。彼女は「ねえ、さっき母さんの家にいたでしょ。スラはなんだった?」と尋ね、気づかなかつたという返事を聞いてちょっとためらった後、その母親の家の方へ向かい、酔で煮込んだ小魚と蒸かしたイモを入れた皿を手にして戻ってきた。このようにスラのやりとりは、子供が結婚して独立した後も親子間でみられるし、兄弟姉妹の間でも行われている。

もちろん、諸々の理由で、近親者よりも、そのときどきに仲良くしている非近親者に頼る場合も多い。たとえばニニの場合、スラに困ったときにアロする相手は両親のほか、2人のいとこ、それからルスなど彼女のおしゃべり仲間である。雑役夫の弟2人には事実上頼れないし、ほかのいとこたちは「子供がたくさんいて大変」「向こうから持ってきてくれれば受け取るけれど、こちらからは恥ずかしくてアロできない」などと言っている。

一方、幸運 (*suwerte*) を得たと考えられる人からは、非常に親しい間柄でなくとも、タイミングよくその場でアロすれば、たいてい何かもらえる。冒頭の、明け方の海辺の様子はその一例だ。ほかに、主に男性の間の娯楽として昔から人気のある闘鶏の例を挙げることができる。勝利した鶏の所有者は掛金と死んでしまった相手方の鶏をもらうが、周りの人はその鶏の肉の一部や勝利を祝う宴会に出された食べ物の一部をもらう。移住した村人の帰省に際して催される宴会もこの部類に入るだろう。村からマニラなど他の土地へ行く

ことは「幸運を求める」(*makipagsuwertehay*)行為とみなされている。帰省となると、その結果を問われるわけで、たくさんの土産を持ち帰るだけでなく、数日にわたり酒や食事を振舞ったりもする。そんな宴会で出された食べ物をもらうことは、特に嫌いな相手でない限り、問題ないどころか主催者にも喜ばれる。

スラをアロする際のもっともわかりやすい形式は「おたくの（食べ物の名前）をアロする」などと相手に面と向かって言うことである。それ以外に、冒頭で紹介したティミーとタソイの間で交わされた「無言の」アロや、別の人を媒介者として立てて顔を合わさずに行うアロもあり、これらの方がより一般的だろう。アロではなく、日本の「おすそわけ」のような慣習も強い。スラが量的にたくさんあつたり、珍しいスラを持っていたりする人は、身内や仲間にも分けることを期待されている。

バト村の複雑な人間関係をひも解く切り口としては、雇用関係、村組織の構成員、祭事への参加者等々の観察が考えられる。だが、案外、日ごろ何気なく観ているスラのやりとり関係もその1つになるのかもしれない。

人柄を試される試金石

スラは「持たざるもの」にとってだけではなく、「持つもの」にとっても悩みのタネになりうる。

相互扶助の精神と実践はフィリピンに限ったことではないが、フィリピンでは特にそれを尊び、人の良し悪しを判断する際の重要な

柱に据えている。その一方で、パイがそれほど大きくないのならば、周りを助けるよりもまず自分の暮らしを少しでも良くしたいという欲求も人々にはある。口コミや電波を通じて購買意欲を誘ったり、さまざまな生き方を紹介するような情報が毎日流れる現在、これら2つの価値観のベクトルの間での揺らぎはいっそう増しているといつても過言ではないだろう。

しかしながら、バト村では現在でもスラがない人を目の前にして、持っているのに与えなかつたとなれば大問題だ。スラをアロされることは仲間（ときには事実上の配下）が増えることであり、悪い気はしない。期日の保証はないが、機会が来れば何らかの「お返し」も期待できる。とはいって、スラは毎日のことであり、いつもアロされると嫌気がさすときがあつても不思議ではない。なかには単なる便乗としか思えないようなアロもある。だからといって、邪険に対応してしまったら、厳しく取り立てるサリサリストアのオーナーと同様、「けち」「人を見下している」「石の心（冷たい）」等々の悪い評判が流れる事態を招きかねない。そうなれば仲間は減り、村での商売は上がつたりだ。バト村では経済力を持つ人は村会議員になる傾向があるが、「けち」と呼ばれるようになってしまったら票は集まらないことは目に見えている。

村の世界と「マニラ」の世界

冒頭で紹介したタソイには、サリサリストアを切り盛りしているダンダンという娘がい

る。20代だが、タソイと似て勤勉なうえに商才もある。これまでに彼女はチャンスとみては新しい種類の野菜の栽培をしたり、村の中で惣菜屋を開いたりした。だが、どれも長くは続かなかった。「たくさんアロに来るんだもの。拒否するとつぶされそうになる。マニラならそんなの無視できるらしいけれど、ここでは難しい」悪い評判が立ち、タソイ一家の他の商いにまで影響が出たら大変だという家族の意向もあり、止めたらしい。

ダンダンのため息を聞いた日の夜、彼女の将来について思いをめぐらした。彼女にはマニラで頼ることのできる家族がいる。マニラなどの都市でのチャンスに希望を見出そうとすれば村を離れる日が来るかもしれない。社交性と合理的な考え方を持つ彼女は自分でビジネスをしても、別の人々に雇われても上手

くやっていく可能性は高い。そうなった時、彼女は村とどう向き合うのだろうか。貧しくともスラを互いに融通しあう郷里を恋しがり戻ってくるか。それとも「助け合い」に足を引っ張られる慣習はごめんだと遠のくか。あるいは、その中間として——多くのマニラ在住の成功者たちがそうしているように——生活の拠点はマニラに置きながらも、時おりたくさんの土産をたずさえながら村に帰省するのか。

スラのやりとりの様子を知れば知るほど、村の人たちが教えてくれた「ナノ・アン・スラ？　おかげはな～に？」という基本文には深い意味があるような気がして、私はいまだに彼らに向かってこの質問を言えないままでいる。